

# 「愚直」語彙力強化特講

～頻出テーマで掴む言霊たち～

## 【小手試し試験】

- ・ 解答時間…六〇分
- ・ 大問数…四(全問必答)
- ・ 一〇〇点満点…漢字一〇点・評論四〇点・小説四〇点・語彙一〇点
- ・ 解答方法…選択・記述併用

\*難度は低く設定していますから、解法の確認に重点を置いてください。満点目指してファイト！

作題者…key太(広島キャンパス所属)

## 第一問

…次の傍線部の読みをひらがなで書き、カタカナを漢字に直しなさい。

(配点・一〇点)

問一、新たな問題が惹起する。

問二、約束を反故にする。

問三、洒脱な話振りで人気がある。

問四、狭隘な学問の世界を飛び出す。

問五、酒と女に耽溺する。

問六、ヒキンな例を示す。

問七、アラカジめ通知する。

問八、チキを訪ねて語り合う。

問九、キュウヨの一策を講じる。

問十、イチゲンコジを旨とする。

## 第二問 … 次の文章を読んで、後の問い(問一～問八)に答えなさい。(配点・四〇点)

お題は「お金と子ども」。子どもにお金の使い方を教えるのはむずかしい。喩えとして落語「雛鏝ひなっば」の話を持ち出す。「雛鏝」というのは、大名の若君が庭で銭を拾うのだが、何しろ生まれてから現金というものを見たことがないので、それが何であるかわからず供の三太夫に訊ねるといふ話である。三太夫は「不浄なものでございますからおとり捨て願います」と答えるのだが、若君はそれにしてもこれは何かとうるさく訊ねる。仕方なしに三太夫は「お当て遊ばせ」と応じる。見れば、丸くて穴が四角、表に字が書いてあり、裏に波が彫つてある。「うむ、これはお雛様の刀の鏝ではないか」と若君は答える。これを見ていた植木職人が、さすが高貴なお方というのはたいしたものだと感心し、それに比べてうちの倅せがれは親の顔を見れば「銭くれ銭くれ」とやかましいことであると嘆息する。落語の方はこのあと話が転々とするのであるが、とりあえずこの逸話から私たちは金は不浄のものであるので、できるだけ手を触れないほうがいいという人類学的常識が江戸時代までひろく④シセイの人々にまでゆきわたっていたことを知るのである。

「金は不浄」という禁忌の感覚は私が育った一九五〇年代まではたしかに日本のふつうの家の庭に存在した。今でも商品の売買以外の場面で、人に現金をわたすときには必ず封に収めて、剥き出しではわたさない。手元に封筒がないときには、「裸で申し訳ありません」と詫びるくらいのが配り誰でもする。貨幣を扱うときには、それが分泌する不浄に汚染されないように①防疫態勢を取っておかなければならない。これは貨幣が人間社会に導入されて以来のルールであるが、とりあえず私の子ども時代までは「子どもの前では金の話はしない」ということは日本の家庭での常識であつたし、「子どもが人前で金の話をする」ことは即座にゲンコツを食らうほどの禁忌であつた。

高校生の頃、仲間とレストランで食事をしたことがあつた。みんなばらばらのものを頼んだので値段が違う。レジで代金を支払うときに、誰がいくらだっけとぎわついていたら、中のひとりがやや気色ばんで、「金のことで人前で騒ぐな」と言つて全員の分を払つてさつさと扉を押し開けて出て行つてしまつた。私はその⑤ケンマクに一瞬あつけにとられたが、「なるほど」と深く得心した。人前で財布を取り出し、現金をいじりながらだからなら時間を通すことはたいへんに「下品」なふるまいであるといふことを彼は家庭できびしく教えられていたのである(もちろん、店を出てから彼にはちゃんと代金は受け取ってもらつたけれど)。長じてからも、何人かで飲み食いしたあとに、勘定を払うときに「ああ、ここはオレが出ておいたから」と言つてさつさと店を出て行つてしまう大人に何度か⑥ソウグウした。「わあ、大人だな」と思つたけれど、私が彼を「大人」と見なしたのは、彼がみんなの分を奢

つてくれるほどに「太っ腹」だったということ以上に、お金を出し入れすると余に見せなかつた手際の良さに感心したからではないかと思う。

お金を使うときに、使うところを見せない。どうもそれが貨幣の扱いについての成人の条件だったようである。その点で、**②お金の話はセックスの話に近いように思う**。どちらも「大人」しかアクセスすることが許されない。どちらもその手際のよい扱い方に習熟しなければならぬのだが、扱っているところを他人に見せてはならない。子どもにはそんな技術はない。だから、お金と異性は子どもに触れさせない、というのが近代前期までの常識であったように思う。

**③それがどこかで常識ではなくなった**。それは「成熟」ということに人々があまり重い意味を与えなくなった時期と一致している。そのときに、セックスと金から子どもを防衛的に隔離していた人類学的な障壁も消失した。不浄というのは、別にそれで病気になるとか、そういうことではない。子どものときに金／セックスに触れてしまった子どもは、おそらく成熟を妨げられる。その子どもたちを成熟にいざなう「推力」の**④ゲンサツ**をして「**X**」すなわち「ケガレ(気枯れ)」とみなしたのではないか。というのは、「成熟する」というのは「**Y**」人間になること」をはるかな達成目標に掲げてさまざまのイニシエーションの条件を一つ一つクリアーしてゆくことだからである。

子どもなのに金やセックスにアクセスできるということになると、子どもは成熟のモチベーションそのものを損なわれる。だから、子どもを対象とする性行為も、子どもを主体とする性行為も、どちらもきびしい人類学的禁忌が課されている。セックスについては、子どものアクセス禁止はまだ部分的には解除されつつあるが**⑤有効**である。だが、**④金との接触に対する禁忌はもはやほとんど無効になった**。子どもがお金に触れること、子どもがお金の話をするに顔色を変えて叱責するような親はもういない。それは言い方を換えれば、とりあえずお金について「成熟なんかしなくてもいい」ということについての社会的合意が成立したからである。成熟なんかしなくてもお金を使うことはできる。「お金の使い方を知っている」ということはもう成人条件からは外されたのである。

むかしはお金の扱い方を覚えるまでには、長い修行が必要であった。少なくとも「長い修行が必要である」ということについての社会的合意が存在した。今はそうではない。小学生に金融商品のシステムを教え、中学生にお年玉での株の売買を勧める親がいる。けれども、子どもがお金を扱えるほどに成熟しているという判断にも、子どもでも扱えるほどにお金は衛生的なものになったのだという判断にも、私は**⑥クミ**しない。子どもは依然として子どものままであるし、お金の持つ**⑦子ども**の成熟を損なうという意味での不浄性も変わらない。変わったのは、「人々が幼児的であればあるほどそのことから多くの利益を得られる」と思っている人間の頭数である。子どもが成熟することよりもむしろ未熟のままであることからより多くの利益を得られると信じている人間の数がどこかで限界を迎えたということである。

だが、子どもたちが「穢れる」ことで社会に利益をもたらすということは、人類学的にはありえない。「穢れた」子どもたち、成

熟のための推力を失った子供たちはやがて私たちの社会の「もつとも弱い環」となり、⑤私たちの社会はそこから壊れてゆくことになるだろう。けれども、それは当の子どもたちの罪ではない。彼らを成熟させることより、目先の利益を選んだ人々の罪である。

(「ひとりでは生きられないのも芸のうち」内田樹)

問一、波線部③④のカタカナをそれぞれ漢字に直して書きなさい。(1点×5)

問二、本文冒頭に提示されている「雛鍰」の喩えは何を表すために使っているか。端的に説明しなさい。(4点)

問三、傍線部①「防疫態勢」とあるがこれは具体的にはどうすることか。18字以内で書きなさい。(3点)

問四、傍線部②「お金の話はセックスの話に近いように思う」とはどういうことか55字以内で説明しなさい。(6点)

問五、傍線部③「それがどこかで常識ではなくなった」について、具体的にその理由を65字以内で説明しなさい。(6点)

問六、空所   について、選択肢ア～オの内から一つずつ選びなさい。(3点×2)

X ア、未成熟 イ、エネルギーの減少 ウ、不浄性 エ、エネルギーの枯渇 オ、病気

Y ア、不浄性を超える イ、金やセックスを主体的に捉えられる ウ、下品なふるまいを抑制できる

エ、金やセックスに触れてもよい オ、金やセックスを対象化できる

問七、傍線部④「金との接触に対する禁忌はもはやほとんど無効になった」について、筆者の主張が書かれた形式段落を漢数字で書きなさい。(3点)

問八、傍線部⑤「私たちの社会はそこから壊れてゆくことになるだろう」について、その理由を80字程度で説明しなさい。(7点)

## 第三問

祖父の死を悲しみながらも実感が湧かずにいた小学五年生の「少年」は、漁師であった祖父と父（ハジメ）を取材したことのある記者のシライさんをお通夜の時間まで案内することになった。次の場面は、「少年」とシライさんが民宿『みちしお荘』で話をしているところである。文章を読んで、後の問い（問一～問七）に答えなさい。（配点・四〇点）

「写真、見せてやるよ」

床に置いたバッグのファスナーを開け、中から分厚くふくらんだ封筒を取り出した。

「これ、ぜんぶ写真なんですか？」

「ああ。ぜんぶ、おじいさんとお父さんの写真だよ」

ほら、これ、とシライさんは封筒から出した写真を何枚かまとめて少年に渡した。

祖父と父がいた。船に乗っていた。二人ともいまよりずっと若い。父はまだ二十歳そこそこで、祖父も還暦前だった。

はげていない頃の写真を見せたらおじいちゃんは恥ずかしがるだろうか、とクスツと笑いかけて、ああそうか、もうおじいちゃんと話すことはできないんだな。おとといから何度も思ってきたことなのに、いま初めて、それが①悲しさと結びついた。

漁をしているときの祖父の写真は、どれもタオルを頭に巻いていた。いつもだ。昔から変わらない。最後の漁に出たおとといもそうだった。出かける前に庭のほうに回る。漁の道具をしまった納屋の脇に、針金を渡した物干し台がある。昨日のうちに干しておいたタオルをそこから取って、キュツと頭に巻きつけて、「ほな行ってくるけん」と港へ向かう。漁を終え、魚市場に魚を卸し、仲間と軽く一杯やってから家に帰ってくると、頭からはずしたタオルを水洗いして、物干し台の針金に掛ける。ずっとそうだった。

②毎日毎日、それを繰り返していた。

「ほら、この頃はまだお父さんの雰囲気、あんまり漁師らしくないだろ」

「……はい」

「漁師を継ぐのは嫌だ嫌だって、俺と酒を飲むと文句ばかり言ってたんだ」

「そうなんですか？」

「いまは、生まれついでに漁師です、って顔してるけどな」

シライさんはおかしそうに笑った。

グラビアの撮影の仕事は一週間ほどだったが、家に泊まり込んでの取材をつづけたおかげで、祖父や父とすっかり仲良くなった。

「仲良くなったっていつても、俺は東京だから、年賀状のやり取りぐらいしかできなくて、おじいさんが生きているうちにもう一度会って写真を撮りたかったんだけど……でも、昨日ハジメさんから連絡をもらってうれしかったし、けっこうスケジュールは

キツかったんだけど、ボクに会えたから、やっぱり来てよかったなあ、って」

シライさんはバッグから別の封筒を取り出して、中に入っていた葉書を「特別に見せてやるよ」と少年の前に置いた。年賀状だった。差出人は祖父。印刷された文面の横に、手書きの一文が添えられていた。

「愚息もようやく一丁前になり、孫もこの四月で六年生です。三代で船に乗れたら嬉しいことです」

③祖父の字だ。間違いない、これはおじいちゃんの字だった。

「ボクは大きくなったら、なにになりたいんだ？」

照れくさかったが、正直に「Jリーガー」と答えた。シライさんは「そうか、じゃあもつとたくさん食べて、もつと大きくならないとな」と笑ってくれた。

陽が落ちてから、少年はシライさんと二人で家に戻った。

シライさんはお通夜の焼香を終えると、広間で親戚や町のひとたちと酒を飲みはじめた。シライさんの持ってきた祖父や父の若い頃の写真は、みんなの思いつき出話の肴になっているようだった。

少年は、また居場所をなくしてしまい、外に出てそつとサッカーボールを蹴ったり、台所を覗いたり、階段の踊り場に座ってマンガを読んだりして暇をつぶした。『みちしお荘』にいた頃はあんなに仲良しだったシライさんが、家に着くとあっさりとおとなの仲間に入ってしまったのが、ちよつと悔しかった。

台所の前を通りかかったとき、叔母さんたちの話し声が聞こえた。祖父のなきがらを清めているときの話だった。首筋の皺をタオルで拭いていたら、潮と、魚と、それから錆のおいがたちのぼってきたのだという。「何十年も船に乗ってきたんじゃけん、体に染みついとるんじやろうねえ」と叔母さんが言うと、母が「お義父さんは風呂が嫌いじゃったけんねえ」と返し、みんなで懐かしそうに笑っていた。

おとといまではこの家にいたひとのことを、もうみんなは思い出話にしてしゃべっている。

④急に寂しくなった。涙は出なくても、だんだん悲しくなってきた。

玄関からまた外に出て、庭のほうに回った。

納屋の脇に、ほの白いものが見えた。

祖父のタオルだった。

手を伸ばしかけたが、触るのがなんとなく怖くて、中途半端な位置に手を持ち上げたまま、⑤しばらくタオルを見つめた。

「おう、ここにおったんか」

背中に声をかけられ、振り向くと、父とシライさんがいた。

「おじいちゃんの写真、シライさんに見せてもろうとつたら、面白かったんじゃ。おじいちゃんは漁に出るときはいつもタオルを

巻いとつたろう。じゃけん、家におるときの写真を見たら、おまえ、みーんなデコのところが白うなつとるんよ。そこだけ陽に灼けとらんけん……」

父はかなり酔っているのか、呂律の怪しい声で言つて、体を揺すつて笑つた。

「ほいで、いまでもそうなんじゃろうか思つて棺桶を覗いてみたら、やっぱりデコが白いんよ。じゃけん、のう、シライさん、じいさんをええ男にして冥土に送つてやらんといけんもんのう……」

涙声になつてきた父の言葉を引き取つて、シライさんが「タオルを取りに来たんだ」と言つた。「やっぱり、タオルがないとおじいちゃんじゃないから」

父は涙ぐみながら針金からタオルをはずし、少年に「せつかくじゃけん、おまえも頭に巻いてみいや」と言つた。

シライさんも「そうだな、写真撮つてやるよ」とカメラをかまえた。

少年はタオルをねじつて細くした……いつも祖父がそうしていたように。

額にきつく巻き付けた。

水道の水で濯ぎきれなかつた潮のにおいが鼻をくすぐつた。⑥おじいちゃんのおいだ、と思つた。

「おう、よう似合うとるど」

父は拍手をして、そのままうつむき、太い腕で目元をこすつた。

シライさんがカメラのフラッシュを焚いた。まぶしさに目を細め、またたくと、熱いものがまぶたからあふれ出た。⑤かすかな

潮のにおいはそこにもあつた。



問一、傍線部①「悲しさと結びついた」とあるが、それはどういうことか。80字以内で説明しなさい。(8点)

問二、傍線部②「毎日毎日、それを繰り返していた」について、ここから分かる少年の様子を40字程度で説明しなさい。(6点)

問三、傍線部③「祖父の字だ。間違いない、これはおじいちゃんの子だった」とあるが、ここから読み取れる表現の工夫について簡単に説明しなさい。(5点)

問四、傍線部④「急に寂しくなった」について、少年はなぜこのように感じたのか。70字以内で説明しなさい。(7点)

問五、波線部⑤とありますが、この間にある少年の心理的变化について60字程度で説明しなさい。(6点)

問六、傍線部⑥「かすかな潮のにおい」はそこにもあった」具体的にはどこにあったのか。二単語抜き出して書きなさい。(4点)

問七、この文章の中で特徴的な表現を端的にまとめなさい。(4点)

**第四問** .. 次の語句の意味について端的に説明しなさい。また、説明に合う語彙を書きなさい。(配点・十点)

問一、パラダイム

問二、アイロニー

問三、普遍

問四、一般

問五、ジェンダー

問六、感情の二者同居性

問七、西洋人が東洋を色眼鏡で見ること

問八、後天的

問九、根拠もなしに真理だと思いつまれている事象

問十、意識の主体、自己意識